

## 令和5年度第1回岡崎市放課後児童クラブ支援員研修会レポート

【日時】 2023年6月8日（木）9時30分～11時30分

【会場】 岡崎市役所福祉会館 6階大ホール

【内容】 「障害をもつ子どもとともに育ちあう生活づくりとは」

【講師】 佐々木将芳さん（静岡県立大学）

【クラブ】（学童保育所あそびばクラブ）

【名前】（ ヒライワヨウスケ ）

この研修で括弧書きで示された「問題行動」について考えてみることにする。さて、この「問題行動」は、誰の？どんな？「問題行動」なのだろうか？少しずつ言葉を足したり引いたりしてみるとなにかが見えてくるかもしれない。

- ①子どもの問題行動
- ②大人から見た子どもの問題行動
- ③大人から見たら問題と思える行動
- ④大人から見たら問題と思える行動だけでも、子ども自身は問題とっていない行動
- ⑤子ども自身は、実は問題だと思って何とかしたいと思っているけれども、なんだかいつももうまくいなくて、同じ行動を繰り返してしまう
- ⑥同じことを繰り返すから、同じことでまた大人に叱られてしまうけれども、自分はそれなりに努力しているつもりだから、長い目で見てほしいと思っているし、大人なんだからなにか特効薬みたいなものを教えてくださいよと思っているけど、そういうふうに言ったらたぶんまた叱られるから言わないでおこうと思っている
- ⑦ということは、大人が思っている「問題行動」と子ども自身が感じている「もんだいこうどう」には、若干なのか沢山なのかは定かではないが、それなりにミスマッチがあるように思われる
- ⑧端的に言うと、大人は注意しても改善がみられないと思っているけれども、子ども自身は自分なりに改善を図る努力をしている途中と思っている
- ⑨であるとしたら、大人側に求められるのは、努力している子どもをあたたかく見守る姿勢ということになる
- ⑩野球チームのレギュラーになるために毎日庭で素振りをがんばる息子を窓からあたたかく見守ることに似ているような気がする

いわゆる「問題行動」は、失敗だったり、間違いだったり、不注意だったり、トラブルだったり、ケンカだったり、泣くだったり、怒るだったり、ワガママだったり、言うこと聞かないだったり、忘れるだったり、ウソつくといったマイナスの言葉と連動する。子どもたちは、こんなマイナスな言動を好き好んでわざわざ選択しているのだろうか。どう考えてもとてもそうだとは思えない。やりたくてやっているとはとても思えない。やりたくないし、やってはいけないと思っているけれども、気がついたら、もしくは結果的にまたそうなってし

まったのだらうと思う。そう考えるとなんだか切なくなる。だからこそ、切なくなっている場合ではなくて、そんな彼らを応援しようという姿勢が、われわれ大人側に求められるのだと思う。

では、具体的にわれわれ大人は、どのように見守れば良いのだろうか？明確にこれといったものはないのだけれども、その子の努力のさまたげになるものは、大人のチカラでまずは取り除くことができると思う。例えば空腹とイライラは相関関係にあるから、朝ご飯や昼ご飯やおやつはきちんと食べる。きちんと食べると便意をもよおすから、たくさん食べてもすぐにウンチができるような環境を整えておくこと。はたまた、失敗や間違いや不注意をできるだけ減らすために、勉強や宿題や忘れ物などなど、ある程度、大人が手伝ってあげること。これは過保護ではなく、1日の生活のなかにある子どもの不安を取り除くことで、心穏やかに1日をすごせるようになることをねらいとしている。そのうち高学年くらいになると恥ずかしいから自分でやるとどうせ言い出すからご安心を。あるいは、大人側が叱る回数を必要最低限にすること。叱られてうれしい子どもはたぶんいない（でも例外はあるような気がする）。叱るのは、生死にかかわることや他人を傷つけたことや二度と起こしてはならないことくらいにして、そのほかのことはある程度大目に見るというスタンスにすると、子どもの「問題行動」に変化が起こるかもしれない。やっぱり叱られることは、それなりにストレスになると思うので、そのストレスが溜まることで、また次の「問題行動」につながるという負の連鎖があるかもしれないと仮定すると、叱る回数を減らすことは、一定の効果が期待できるような気がする（もちろんうまくいかないことがあるのは前提条件ですが）。

それからやっぱりこれがいちばん大切なのだと思うのだけれども、子どもたちは自分自身で立派に成長できるチカラをもっているのだから、そのチカラを信じて気長に見守ることが肝要かなと思う。そしてその長さは18年あると思えば、かなりの長期戦だから、気長にやらないと大人側も疲れてしまうのである。と思った研修でした。